

令和3年度学校推薦型選抜入試最終選考小論文課題

東京大学教養学部教養学科

受験番号

氏名

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面1枚のみとする。

本冊子は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1枚

白紙 1枚

課題 4枚

草稿用紙 2枚

東京大学教養学部

(白紙)

小論文課題（教養学科）

次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

(一) 傍線部について、著者は、欧米の「メリトクラシー」に対して日本の「能力主義」のどこが大きく異なると考えていますか。一〇行以内にまとめて述べなさい。

(二) 日本は「メリトクラシー」ではなく「能力主義」にもとづく社会である、という著者の考えに対して、あなた自身はどう考えますか。著者の考えをふまえた上で、あなた自身の考えを、具体的な例をあげて述べなさい。著者の考えと思われるものと異なってもかまいません。

「メリトクラシー」の訳語として「は」「業績主義」が用いられる場合もあり、「業績主義」と「能力主義」が併記される場合も珍しくない。しかし、Google Scholarで「メリトクラシー」と「業績主義」を検索すると二九九件がヒットするのに対し、「メリトクラシー」と「能力主義」で検索すると七七三件がヒットする。また、いくつかに時期を区切って検索しても、常に「能力主義」のヒット数の方が「業績主義」のそれを大きく上回っている。このことから、「業績主義」よりも「能力主義」の方が訳語として普及していると言える。…

ここでむしろ不思議なのは、日本では「メリトクラシー」に「能力主義」という訳語をあてることがこれほど広がっているが、それはそもそも妥当なのか？ ということである。この問いは、「メリト」は、「能力」なのか？ と言い換えられる。

英語の「メリト」(merit)の意味を英和辞典で調べると、(称賛に値する) 価値、長所、取りえ、美点、手柄、勲功、功績、功労、(請求の) 実態、本案といった訳語が並んでいる。ここには「能力」は含まれていない。

つまり、「メリト」は、一般的な語義としても、本来「能力」とイコールではない言葉なのだ。それにもかかわらず、日本では「メリトクラシー」に「能力主義」という言葉が当てはめられている。イコールではないものをイコールとみなしている、つまり異なるものを同じだとみなしている「傍線部」。これは考えてみればきわめて不自然なことである。

この不自然さの中に、日本社会の特性を理解する上で重要なポイントが潜んでいると考えられる。……

では、実際には何がどう異なっているのだろうか。

まずは、図2-1を見てもらいたい。これは、「ISSP国際比較調査」という、多数の国で同内容の質問紙調査を実施した結果のオープンデータから、「メリトクラシー」に深くかかわる三つの質問項目を取り出し、国別に肯定度の平均値を示したものである。今回使用しているデータの調査年は一九九九年とやや古いが、ISSPは調査年によって質問項目が変わるため、必要な質問項目が含まれている一九九九年データを使用した。

具体的な質問項目（日本語および英語）とスコア化の方法は次の通りである。

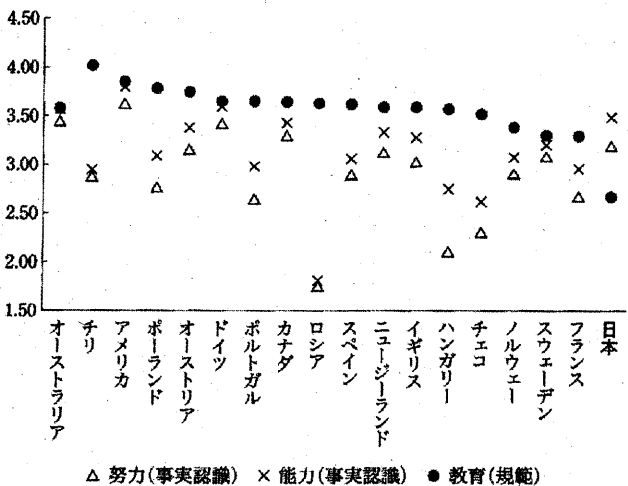


図2-1 メリトクラシー意識の国際比較

出典：ISSP1999 データを用いて筆者作成

・「努力(事実認識)」——「日本では、努力をする人が報いられる」(In [COUNTRY] people get rewarded for their effort)

・「能力(事実認識)」——「日本では、知的能力や技能のある人が報いられる」(In [COUNTRY] people get rewarded for their intelligence and skills)

・「教育(規範)」——給与を決めるときに重視されるべきこと「教育や研修を受けた年数の長さ」(The number of years spent in education and training)

いずれも肯定度五段階+「わからない」で回答を求めた結果に1〜5点を割り当て(「わからない」は除外)、平均値を算出した。

図の中で、日本だけが特異な結果を示していることが一見してわかる。他の各国では、給与の決定条件として教育訓練の年数が重視されるべきであるということへの肯定度が、事実認識としての「努力」や「能力」の尊重の度合いへの肯定度を上回っている。しかし、日本では教育が重視されるべきという考え方への肯定度は図中の国々の中で最も低く、「能力」が重視されているという事実認識の肯定度が高い。

重要なのは、図中の日本以外の国々——そのほとんどは欧米先進諸国である——では、個々人の教育面での履歴すなわち教育歴が給与に反映されるべきだ、という考え方が強いということである。教育歴とは、「努力」や「能力」そのものではなく、それらが教育制度をくぐりぬけることで明確な形をとって公式に可視化されたものである。英語では qualification (資格) もしくは certification (学歴) という言葉で表現される、個人の教育達成を公式に証明した事柄、つまり過去の「業績」が、他の諸国では人々の評価基準として重視されているのである。

この点に、日本以外の国々における「メリトクラシー」と、日本の「能力主義」の、些末に見えるかもしれないが重要な相違の一つが見いだせる。前節で、「メリトクラシー」の本での訳語として「能力主義」以外に「業績主義」という言葉があるという事に触れた。この「業績主義」のほうが、他国での「メリトクラシー」のニュアンスをよく表す、むしろ適切な訳語であると言える。しかし日本では、「業績主義」よりも「能力主義」という言葉遣いが席巻していることもすでに述べた通りだ。達成された事柄の公的な証明を重視するか、それとも、その背後にあるであろう「能力」（および「努力」）をまず思い浮かべるかという事に、彼我の重要な相違がある。

少なくとも欧米先進諸国では「能力」よりも「業績」に関心が向けられているということについては、他にも資料がある。たとえば、社会学者の梶田孝道による、人類学者ラルフ・リントンおよび社会学者タルコット・パーソンズの「業績主義」に関する議論の整理が参考になる。リントンとパーソンズは、いずれもアメリカで二〇世紀半ばにきわめて大きな影響力をもった学者であり、その議論からはアメリカにおける一般的な思考のあり方を知ることが出来る。

梶田によれば、リントンは……天賦の才と努力が結びついたものを業績的地位 (achieved status) とし、性別・年齢・血縁関係など誕生時に決定されてしまう帰属的地位 (ascribed status) と対比していた。それに対して、パーソンズは個人の営為・成就 (performance) に優位を置いた評価を与える場合を業績主義、性能 (quality) に優位を置いた評価を与える場合を属性主義としている。

より特徴的な、後者のパーソンズの議論を原文で確認しておこう。「状況において客体に出会うとき、行為者はそれをどのように取り扱うべきかを決定するジレンマに直面する。客体はそれ自体であるか、あるいはそれが何をなし、またはその行為から何が生じうるか、という二者のうちのどちらに照らして客体を取り扱うべきか。このジレンマは……客体の「性能」の側面に優位を与えるか、あるいは客体の成就およびそれらの結果に優位を与えるか、のどちらかによって解決される」（傍点は引用者による）。

このように、リントンとパーソンズのいずれも、「能力」だけでなく努力などが介在して具体的な成果として現れたものを重視する状況を、「業績主義」とみなしていた。そして、社会の近代化とともに、属性主義から業績主義への移行が生じると論じていた。それに対して、「メリトクラシー」を「能力主義」と言い換える日本では、個々人の「性能」(quality)としての「能力」が重視される度合いがきわめて強いのであり、これはパーソンズの用語法に倣うならば、「業績主義」の対極にある「属性主義」の思考に陥っていることになる。

ここからわかるのは、「欧米」における（正しい）「メリトクラシー」とは、個人の業績としての教育歴や公的資格（のみ）が地位を決める社会という意味で捉えられており、それ以

外の家族背景や生得的性質が選抜に混入することは、そこからの逸脱とみなされるとい
ことである。

対して、日本の「能力主義」はどうか？ それは、属性によって左右されていようがいま
いが、あるいは公的に証明されていようがいまいが、とにかく「能力」がある者が勝つ、あ
るいは誰かが勝ち誰かが負ける理由を「能力」という言葉で説明する、さらには、公的な教
育歴は「能力」の証明の必要条件とされる場合が多いかもしれないが、十分条件ではないこ
とを当然視する、そういう考え方である。学歴はむしろ「能力」（「実力」）を反映しないこ
う見方すら根強い。

出典：本田由紀『教育は何を評価してきたのか』（二〇二〇年）、「」は原文変更

以上

東京大学教養学部

令和三年度推薦入試最終選考小論文問題

東京大学教養学部学際科学科

受験番号

氏名

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、解答用紙、本冊子表紙上部記入欄に、受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面一枚のみとする。

草稿用紙は、白紙二枚とする。

本冊子

表紙一枚

課題三枚

終了後に全て回収する。持ち帰らないこと。

フィールドワーカーがわざわざ遠く離れた現地にまで出かけて行ってそこに住み着き調査を行う第一の理由は、その現地においてこそ、人伝てによる二次情報ではない一次情報が手に入るからに他なりません。土地の人々と生活と行動をともにする参与観察と呼ばれるやり方は、まさに、現地の人々と同じような生活をするなかで、その一次情報を自分の目と耳を使って収集するテクニックであるといえます。

その土地に生まれた子供が言葉やしきたりを学びさまざまな知識を身につけていくなかで一人前のメンバーになっていくように、フィールドワーカーはその土地の水になじみ人々に受け入れられていくなかで、一次情報を集め、また文化を学んでいきます。フィールドワークというのは、いふなれば文化的な子供時代の再現であり、また、フィールドワークの成果をまとめた民族誌というのは、この文化の学習にもとづく報告書であるといえます。

ここで一つの疑問がわいてくるかもしれません。子供が一人前のメンバーとして認められるようになるまでには、ふつう少なくとも十数年の歳月が必要です。これに対して、参与観察を行うフィールドワーカーがその土地に滞在する期間は長くてせいぜい数年です。一年や二年ということもざらにあります。こんな短いあいだに満足のいく「文化の学習」などということが出来るのでしょうか。もしかしたら、民族誌というのは、しよせん、その土地の人々自身の誰かが少しのあいだ勉強して調査レポートの書き方を身につけさえしたら簡単に乗り越えられてしまうような、そんな程度のものではないのでしょうか。何しろ、本物の一次情報を持っているのは、他ならぬ現地の人たちなのですし、情報を得る上で何よりも大切な道具である言葉という点では、現地の人々とフィールドワーカーの能力をくらべるまでもありません。

この疑問は、一面の真理をついています。実際、外国の人類学者や社会学者が日本を対象にして書いた民族誌的な書物を読んでもみると、とんでもない事実の誤認や明らかに間違った解釈をよく見かけます。同じようなことはアフリカ研究についても言えるらしく、マクスウェル＝オウスというガーナ出身の人類学者は、「アフリカに関する民族誌——無用物の効用」というかなり痛烈なタイトルの論文で、大家とよばれた人類学者の書いたアフリカに関する古典的な民族誌がいかに誤解と事実誤認にもとづいているかを明らかにしています。

しかし、右のような一連の議論は、一つ大切な点を見落としてしています。一見奇妙なことのように聞こえるかもしれませんが、実は、現地の当事者の人たちは必

ずしも自分たちの社会について「一番よく知っている人たち」であるというわけではないのです。

まず第一に、日常生活の中にはごく当たり前のこととして無意識のうちに処理して済ませてしまう事柄が非常に多いものです。日常的なあいさつの仕方からふだんの会話における適切な発言の順番まで含めて、私たちの生活は、無数の暗黙の了解によって支えられています。換気が悪くなったりしない限りは、ふだんは空気というものの存在とその大切さにあまり気がつかないものですが、同じように、日常生活を支える無数の暗黙の了解事項というものには、普段はなかなか気づかないものです。あらためてそれを意識するようになるのは、誰かがそれに反した行為をした時とか、子どもや外国人に対してその了解事項を教えようとするような時です。参与観察を行なうフィールドワーカーは、まさにこの点で、子どもや外国人に近い立場にあるといえます。フィールドワーカーは、一方では当事者たちと生活をともにしてそのような日常的な細々としたルールを学習しながら、同時にそれらを異人の目で観察し記録していくことができるのです。

第二に、当事者というものは、自分の生活に関わる物事についてきわめて限られた知識しかもっていないことも多いものです。たとえば、日本人であるならばほとんどの人は義務教育と高校教育をあわせて十二年間の歳月を「学校」というところで過ごすわけですが、はたしてその長年にわたる学校との関わりを通して学校制度というものについて私たちはどれほどの知識をもっているのでしょうか。つまり、当事者というものは、普段の生活においては、日々の生活を問題なく送るのに必要なだけの知識さえあればこと足りることが多く、自分の住んでいる環境について驚くほど限られた知識しかもっていないことも多いのです。

最後に、異人としての参与観察者が当事者の利害関係に対して中立的な立場を取れるということも、フィールドワーカーが当事者よりも事情通になれる理由として大切なポイントです。碁に関する言葉で「岡目八目」というのがあります。碁を打っている当事者たちは当面の展開や勝ち負けに注意が奪われて先の展開まで読めないことが多いけれども、外からこれを観戦している者は、観戦者としての冷静な視点から八目先まで読めるというのです。同じように、調査の対象であるその土地の社会活動に参加しながら当事者たちの利害関係の機微にふれることが出来る参与観察は、同時に、その利害関係に対して中立的な立場を取

することもできます。これによって、目先の利害を離れた広い見地から物事を眺めることができるようになるのです。

このように、フィールドワーカーというのは、当事者と局外者という二つの視点をあわせもつ第三の視点を持つことによって、いくつかの点でその社会について当事者以上の知識を得ることができるようになります。この意味で、フィールドワーカーの一つの目標は、その土地で「物知り」「わけ知り」「事情通」と呼ばれている人たちと同じような知識を身につけることにあるといってもいいでしょう。しかし、フィールドワーカーには、もう一つ別の目標があります。そしてその目標を首尾よく達成した場合には、時によっては、土地の物知りたち以上の知識を得ることができます。

なぜならば、物知りはたしかに「一番よく知っている当事者」かもしれませんが、同時に「一番よくそれについて報告し説明できる者」であるとは限らないからです。もっと一般的にいえば遂行面での知あるいは<何かが出来る>ということと批評的な理解の知あるいは<それについて理解し言葉によって説明する>こととは必ずしも同じ性質の能力や知識ではないのです。たとえば、言葉について人が「知っている」ことについて考えてみましょう。アメリカ人の子供だったら確かにたいていの子は英語をきわめて流暢に話せるでしょう。しかし、その子供は自分が使いこなしている英語の文法という点ではどの程度の知識を持っているでしょうか。文法に関する知識という点では、アメリカ人の子どもは、片言しか英語を話せない日本人の文法学者よりもはるかに劣っていることでしょう。

出典：佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク——書を持って街に出よう』（一部変更）

問題

- （1）下線のような批判に対し、フィールドワークに基づいた研究の学術的な意義はどこにあると考えられますか。上記の文章の内容を踏まえて説明しなさい。
- （2）二重下線の「遂行面での知」と「批評的な理解の知」の関係はどのようなものであると考えられますか。あなたが大学で勉強・研究を行いたいと考えている領域における具体的な例を挙げて説明しなさい。

以上

令和3年度推薦入試最終選考小論文課題

東京大学教養学部 国際環境学コース

受験番号 _____ 氏名 _____

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面2枚のみとする。

草稿用紙として、B4用紙2枚を使用してよい。

本冊子、解答用紙、草稿用紙は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1枚

白紙 1枚

課題 1枚

白紙

小論文課題

(Essay questions)

Write your answers in English.

Question 1: What do you think is the biggest environmental challenge currently facing humanity and why?

Question 2: What is the difference between science and pseudo-science?

以上

東京大学教養学部